壺井栄論（15）―第六章　戦時下の文学（1）―

A Study of TSUBOI Sakae (15) : The Literature in Wartime (1)

鷺　只　雄
SAGI Tadao

一

戦時下の栄、追跡　栄が「大根の葉」（昭13・9「文芸」）でデビューし、第一創作集『暦』（昭15・3・9　新潮社刊）がブレークし、更に翌年二月には昭和十五年度の最もすぐれた新人に贈られる第四回新潮社文芸賞を受賞して、三十九歳という非常に遅い出発ながら幸運な、幸先のよい、作家人生をスタートさせることができたのは恵まれていたというべきである。

時代は日一日と戦時色を強め、殊に左翼勢力に対する弾圧は厳しさをきわめていたからである。例えば、栄の文学上の師匠とも言うべき宮本百合子の場合で言えば、昭和十三年一月から翌年春まで[1]執筆禁止（中野重治らも）、十四年三月に「その年」を書き上げるが、内務省の検閲で発表不可、十六年一月から再び執筆禁止となり、太平洋戦争が勃発すると翌日から検挙され、巣鴨拘置所に送られ、十七年七月、熱射病のため昏倒、人事不省となり、死なれるのを恐れた当局は執行停止で出獄させ、百合子は生死の境をさまよう[2]、というふうに、物心両面にわたる過酷な制裁が待っていたからである。

一方、昭和十三年二月十八日に、石川達三「生きている兵隊」掲載の「中央公論」三月号を発禁処分にして検閲を強化、政府は三月には今年からのメーデーを禁止し、五月には国家総動員法を施行、九月には従軍作家部隊として、久米正雄・丹羽文雄・菊池寛・吉川英治・西条八十・林芙美子らが中国戦線視察に出発、十月には日本軍が武漢三鎮を占領するも中国の抵抗激しく、泥沼化の様相を呈し、十四年にはノモンハン事件がおこり、日本軍が敗退し、国民徴用令が施行され、九月、ドイツがポーランドに進攻して第二次世界大戦が始まり、この年戦争を扱った作品が一段と増え、大陸開拓文学・

海洋文学など、さまざまな国策文学が書かれた。十五年には、日独伊三国同盟が結ばれ、大政翼賛会が発足、文芸家協会主催の文芸銃後運動の講演会が各地で始まった。昭和十六年に入って二月に、内閣情報局は総合雑誌編集部に対し、執筆禁止者リストを示し、四月から小学校を国民学校と改称、六月独ソ戦始まり、十月東条英機内閣成立、十二月に太平洋戦争勃発。この年前後に芸術家の統一的団体結成への動きが盛んになり、戦争協力の体制が固められてゆく。昭和十七年六月、ミッドウェー海戦での敗北を機に、各地で日本軍の敗色が濃厚となり、十八年二月にはガダルカナル島撤退開始となり、同月スターリングラードのドイツ軍降伏、三月、歌舞伎座などの大劇場閉鎖となる。七月、東条内閣総辞職、小磯内閣成立。九月イタリア降伏、十月学徒出陣の壮行会を明治神宮外苑で挙行。この年、谷崎潤一郎「細雪」の連載発表が禁止、すでに徳田秋声の「縮図」も十六年九月には中絶に追いこまれ、永井荷風は干渉される以前に、執筆して書き溜めることはしても「廃業宣言」をして敗戦まで発表することは一切しなかった。二〇年二月には米・英・ソ首脳のヤルタ会談があり、三月東京大空襲により下町一帯は甚大な被害を受け、五月ドイツ無条件降伏、八月広島・長崎に原爆投下され、日本は無条件降伏、という道を辿ることになるのであるが、その戦時下の栄の軌跡をこの稿では追ってみることにしたい。

二

『祭着』　「まつりご」とよみ、同題の作品が他にもう一つあるので、混同を避けるために、文泉堂版壺井栄全集でしたようにこれは**「まつりご」**（A―児童）と表記することにしたい。ただし、「まつりご」（B―随筆）の方は作者の死の前年に書かれた短い随筆で、引用されたこともないため、「まつりご」（A―児童）と混同されるおそれも余りないと思われるので、本稿では、正式には「まつりご」（A―児童）と表記するが、時には便宜上「まつりご」、「まつりご」（A）と略称したこともあることをお断りしておきたい。

さて、表題の「まつりご」とは、四国小豆島地方の方言で、村祭の時に子供たちが着る晴れ着のことである。祭は栄の生まれた坂手村の隣り苗羽（のうま）村にある郷社、八幡神社[3]の祭礼のことで、旧内海五カ村の氏神として、また江戸中期以降は廻船業が盛んになるとともに海上安全の守護神として信仰を集めた。

祭りの日はもと、旧暦の八月十五日であったが、明治41（一九〇八）年以後は、太陽暦の十月十五日に改められ、祭りの圧巻は「太鼓まつり」と呼ばれるように、各部落から奉納される太鼓であった。

それともう一つ、その日は女の子にとっては一年のうちで最も晴れがましい日で、「一張羅のまつりご」[4]を着飾ってゆく喜びがあった。小豆島ではこの秋祭りを中心にしてちょうど都会の七五三のお祝いの時のように女の子の着物を作る風習があり、殊に年ごろの娘をもつと、親も子も気もそぞろに、まつりごに熱をいれ、町の呉服屋は流行の衣装を持ちこむことに忙しい。

そしてお祭当日はきそって娘に着飾らせ、母親が付き添って八幡様の高い石段をしずしずとのぼってゆくのだ。

つまり、これは私の家にはこういう娘があります、どうぞよろしくというお披露目なのであり、立場を変えれば、嫁選びの場であり、見合いの場でもあったというわけなのである。[5][6]

タイトルの話題から入ったので、「まつりご」（A）を最初に取り上げるが、この作品の初出を世間では普通年譜などによって昭和十五年一月「同盟通信」とするが、それは誤りである。何故なら、「同盟通信」という刊行物はこの時期存在しないからで、これは同盟通信社がこの作品を買って、その掲載を希望する会社に売ったことを意味するものと思われる。実際にこの作品は私の調べた範囲では「徳島毎日新聞」（昭15・1・1）と「南支日報」（昭15・1・20に（上）のみ掲載）に掲載が確認されていることによってもそのことは裏付けられることであろう。[7]

この作品の梗概は、他国から父に連れられてこの島に来たトシ（八歳）と千吉（七歳）の姉弟が父に死なれて物乞いのくらしをしていたのを樽屋のおばあさんに拾われて、子守と雑用をしながら学校にも通学して安住できる話で、元日にふさわしく、ほのぼのとした暖かい感情が読者の心に流れてきてホットさせる作品であり、栄の童話、第一作である。

栄の童話（本稿では児童文学と全く同じ意味で用いる）の最大の特徴はおばあさんが登場してその人間的魅力―包容力の大きさ・暖かさ・人情の手厚さ等々を遺憾なく発揮して見せるところにあるのだが、この第一作においてもそれは既に明らかなようだ。

夜更けの荒神様の森の方から聞こえてくる不思議な音が、不幸な境遇にある姉弟たちの風船で遊ぶ音であると知った時に発する言葉は「トシ等か、遊びよんのか、夜露は毒ぢやで」（初出はこうだが、初版以後は「あしたはご飯をあげるせに、とりにお出で。」と変更される。しかし、初出の味も捨てがたいのでこだわってみた）と言うもので、そこには疎外し、差別する心情は露見られないのみならず、「夜露は毒ぢやで」という言葉には同じ人間としての子供への注意と健康への配慮があり、二人を引き取って「うちの子じゃ」と言うからには「云うことを聞いたら」を条件に、きっぱり「腹一ぱい飯を食べさせてやる」「学校にもやってやる」「秋祭にはまつりごを作って着せ、五銭の小遣いを与えて氏神様へお詣り」をさせてやったのである。

同時に、きちんとしたしつけも怠らない。「ん」と返事をすると即座に、「ハイ」と直させ、まつりごを翌日も着てくると途端に「常にまつりごを着る者は、祭や旗日に乞食の着物を着にゃならん」と、ハレとケのケジメをきちんとしつける。こうして姉弟は境遇の変化に驚き、喜びつつ、生き生きとした生活を見つけ出してゆくのである。

これは実話で、やがて成人した姉は相当の嫁入支度をしてもらって結婚し、弟は樽屋として独立した由[8]であるが、決して豊かというわけではない若い樽屋夫婦が、老母の勧めでみなしごの姉弟を引きとって、互いに助け合いながら共に生きて行くという構図は、それだけで読むものの心を打つが、それが金持や物持で暮しに不自由しない人々ではなく、その日暮しをする職人一家の人々であった点で感動的であり、この種の問題を考える上で示唆的であるように思う。

この作品における成功が、のちに児童文学界からの執筆依頼を要請し、新たな才能の開発を促すのであるが、その事については後述する。

「海の音」（昭13・2「自由」）は十二歳をかしらに五人の子持ちである与平の思いを、盆の数日の中に描いた反戦小説の好短編である。「反戦小説」というと、どこが反戦か？とすぐ反論が来るよう

に、この作品は一種の反戦小説を意図したものだが、一見すると戦争協力の作品としか読めないようにできあがっているわけで、まさしくそれは平野謙が「ここに壺井栄のまぎれもない芸術的資質がある。」と絶賛する所以であろう。

それを以下に探ってみると、現在、三十代の与平は妻と五人の子供達との生活を宝物のように大事にしている。それは自らの極貧の幼少期に対する反動でもあって、父は蓄財のためには、妻子も平気で捨てる血も涙もない男であった。与平が船乗りになったのも、父が息子に食わせるのが惜しくて船長にくれてやったからで、そこで船長から始めて人並みに扱われ、教えられて今日の与平ができた。十三年前に父が死んで、六二〇円の大金が残されていたが、与平は一航海休んで酒にそれを全部捨てる、理由は父が金を貯めようとしたばっかりに極貧と屈辱と不幸があるのだと思えば、金は敵であり、仇だからである。家庭団欒の最中に動員令が出て与平も出征することになり、与平は薪を割りながら「ちき生ッ！　ちゃんころ奴、女房子供と、こんちき生！　生き別れ、さしくさる！　くそッ」とどなる。

与平にとっては妻子との生活が、家族にかこまれてのくらしが生涯の憧れであり唯一の望みであった。それ故にそれをはばむものは敵であり、「こんちき生！」であり、「ちゃんころ奴」であった。敵意むきだしでわかりやすい。（従ってより正確には反戦小説、あるいは反軍小説というよりも、厭戦の感情が露骨に吐露された作品と見るのが適切かもしれない）しかしそれだけではすまない。当然そのあとの、与平が出征したあとの家族はどうなるのか、どう暮らすのか、という問題があるからだ。八歳の三郎が言う。

「ふうん。――あののうお父つぁん、僕ら兄やんと二郎と三人で約束したんで。お父つぁんが兵隊に行ったら兄やんは学校やめて醤油工場い行くんじゃ。村長さんにたのみに行く云よった。二郎がのう、洗たくしたり、飯たいたりしてお母さんを手伝うてのう、僕はねんねの守をするんで。もう、喧嘩やこいせんのじゃ。――あののう、うどん屋のばあやんはの、あっこの兄やんが戦争に行ったんで、それから心臓がドキドキしてうどんがこしらへられんのじゃといの。それからのう、面っ白いんで、さかな屋のばあやんはのう、昨日学校で、私しゃもう嬉して、嬉して、云うてわあわあ泣っきよんで。僕ら泣かせん」

十二歳の長男は退学して働きに出、十歳の次男は母を手伝って洗濯炊事をし、三男は子守、というように幼い兄弟たちが知恵を出しあって、協力して一家を支えるから心配いらんと言われて与平は思わず涙をこぼす。子供たちはあくまでも冷静に、感情をコントロールして「喧嘩」はせず、「僕ら泣かせん」と云いきって、与平の場合の「恨み」の感情一筋とは明らかに違っていることを示したからである。

また小説の末尾で、三郎がもし与平が戦死したら戦争墓にあるあんな石塔よりももっと大きな石塔を建ててやると言ったのをとがめて一郎が、「三郎！　おんどりゃ！　げんのわるいこと云いくさんな」と叱るが、与平はもはや平静であった。

しかし、与平にとってはどれもみな嬉しい言葉であった。自分が、未だに捨てられずにゐる親父銀六への意趣と、子供たちが父親としての自分にもっていてくれる気持のつながり方を並べて見て、たとえそれは華々しい戦死ではなくても、自分が死んだあと

子供らは必ず自分の石塔をさすり、心から花を供えてくれるだらうと思えた。

与平の父へのそれが、「恨み」「つらみ」「激情」といってよいものであるのに対して、子供たちの与平へのそれは、「平静」「自由」「親愛」にみちたものであったからである。

とすればその時与平の心にあったものは激情からのカタルシスを経た平穏静謐な心情であったであろう。

「たんぽぽ」（A—小説・珊瑚もの）〔昭14・9「婦人公論」〕は二人の子をかかえた未亡人が産婆の修行の過程で遭遇する〈犠牲〉の問題を扱った作品。父母に早く死なれた珊瑚は姉のキヨノに育てられ、結婚して二児の母となった所で夫が急死、三年後に二人の子を姉に託して上京、産婆の試験に合格してあと一年で帰郷というところにまでこぎつけるが、五十近くなった姉からは二人の子の世話は限界、一人を養女に出したい、としきりに連絡があり、相手が見に来たとまで言うので、とられては大変と帰郷してみると、リューマチで足を引き、年齢よりは十歳は老けて見える姉の姿に胸をつかれる。思えば二十八歳で夫と死別後二十年、日傭取りの過酷な肉体労働を続け、その間珊瑚を女学校にやり、その子を二人まで育てて来ているのを考えれば姉の養女の話はもっともなわけで、受け入れようと決心する。

女の自立—特に子供をかかえる未亡人の場合の問題を扱ったもので現代にも通じる重要なものだが、全てが予定調和的に決定されていて、しかも一人合点の、独白が多くて、読者には作品内に入って行きにくいという欠点がある。

「わんわん石」（昭14・10「月刊文章」）というのは小豆島と思われる島の入江の渚にある犬の姿をした岩のことで、その真上の山中に山見場（鰯が沿岸に寄せられて来たのをいち早く判別して村民に知らせ、指図して一網打尽にする見張役の漁師が坐っているやぐら）があり、太郎吉が親子二代で勤める。今年はカラ梅雨と不漁でお手あげ。久しぶりに、太郎吉のホラ貝がひびき渡り、村中こぞって舟を出し、湯をわかし、準備におおわらわとなるが、そこへ太郎吉の三男がわんわん石の所で溺死したとの知らせが入り、その母は半狂乱、その夜から雨は降り続く、というもので、率直に言って三男を何故殺すのか不明である。久しぶりの大漁の予感に村中が大騒ぎして、母親は子供の事を忘れていた「うかつさ」「人間の薄情」さを反省するのだが、この反省は一体どれだけ意味があるのかと問うて見れば明らかなように、殆ど無意味であろう。大漁に村中が湧き立ったことと、子供の死との必然的な因果関係は何ら見出せないからである。

次の**「三夜待ち」**（昭15・5「日の出」）は集中第一の傑作であると同時に、栄の全作品中でも屈指の名作といってよいであろう。

島（小豆島と思われる）育ちのシノは、五十五歳。大和屋の主人に信用されて常傭、ミカン畑はシノに任せきりであった。或春の日、シノはミカン畑で仕事中に鳶に弁当を盗られてしまう。するとその日相棒の新六爺さんが白米弁当を半分くれ、おかずの丸いままの沢庵を出して「どうぢや、おシノさん、両方からかみつくかいの」とおどけながら言って助けてくれたのでその日は大助かり。二人は共に一人身で（新六は「六十過ぎ」）それ以来爺さんは足繁く訪ねたので二人の仲は一挙に深まり、シノはいそいそと迎え、楽しく過ごし、男は結婚を口にするが、内心とは逆に女ははねのけ、後悔する。

シノの過去は無惨であった。器量が悪く、身体が小さいということだけで不縁となり、二十五の時に嫁がされたのは酒飲みの舅と気狂の姑（おしゃれして村内を歩き、やがて着物を脱ぎ捨て、全裸になるまで帰らないのでシノはそれを拾い集めなくてはならない）がある十九の漁師（年上で器量の悪いシノを憎んで口もきかない）というとんでもない一家で、以後二十五年間三人が死ぬまでシノの苦闘が続いた。

そして一人になった楽しさ、明るさ—世の中の面白さ、生きていることの楽しさをはじめてシノの知ったのがここ数年のことであり、その胸の奥深くには、たたみこまれたままシノ本人にも忘れられたままになっている若い日の心＝「一生懸命働いてさえいれば、誰かが嫁に貰ってくれるだろうというシノのひそかな願い」がまだ生きていて、「飛び出そう、飛び出そう」としているのに気づかない。

秋の半ばの夜、新六は酒を抱えて訪ね、シノはいそいそと迎えてお菜を用意する。外は婿入りの行列を眺めに行く人々の足音が繁く、折柄、今日は三夜待ち、二人の心が「流れ合ふばつの悪さ」にシノは用事ありげに外に出る。

一生を「気狂い」一家の世話に明け暮れ、それで生涯も終わりかと思われたシノに突然降って湧いたように現れた新六爺さんによってもたらされる「ほかの人間と一しょにいることの喜び」「うきうきして来る（中略）心のはずみ」等々、男女間の交際によってもたらされる「愛のときめき」は年令によって変わるものではなく、いつでも、どこでも起こりうるものであると同時に、それが人間の生きるうえで、いかに根源的なものであり、それなしの人生はいかに空しい索漠たるものであるかを素朴に語って名品である。

いわゆる大衆娯楽雑誌に初めて書いた作品だが、評判はよく、編集担当者の和田芳恵から、当時花形人気作者の川口松太郎から編集部宛に速達が来て栄の作品を絶賛していると聞かされ、更に和田は大衆誌の小説でこんな葉書をもらうことはめったにないことですが、ともらしたという。[10]

「ガンちゃん」（昭15・6推定　発表誌未詳）は二児の子をかかえて働く母親（しかも一人は知恵おくれ）の子供の育て方やそれにまつわるさまざまな不安を母親の立場から提起したもので、小説というよりもナマな材料を出しすぎている時事的な問題なのでこれについては栄の姪で目の不自由な発子に触発されての一連の社会的な発言があるので、そこで整理して明らかにすることにしたい。

「窓」（昭15・8「改造」）については前稿で既述したのでそちらを参照願うとして、**「柳はみどり」**（昭15・9「新潮」）について考えると、これはヒノエウマ受難史の物語である。干支（えと）がヒノエウマの年に生まれた女性は夫を殺すという迷信が、戦前までは強くあって、この年に生まれた女性はそれだけハンデを負わされ、理不尽な悲喜劇の中にさらされたという事実がある。

物語のヒロインとなる双生児姉妹の、半生にまつわるエピソードを、よくもまあ集めたと思う程コレクションして見せられて驚く。

しかし、肝腎の作品の骨組みがしっかりしていないから、この先どうなるのかはわからない。つまり、ヒロインの片割れである妹の八重と八郎との関係が六児の子を生（な）しながら、どうなっているのかさっぱりわからない、この妹夫婦の関係がはっきりしなければ、姉の八重も手を下しようがないのではないか？

また、読者には八郎の人間が描かれていないから、七重とどうなるのかもわからない、未決定の、宙ぶらりんの状態にならざるをえない。

つまり、作者は余りにも世間のなりゆき、風俗のおもむくところに敏感すぎて、現象面でのコレクションには成果をあげたようだが、本当の意味で、結婚とは？　夫婦とは？　というふうに問うてはいないから、これでは答えは出てこない。「文芸」の時評で言う「この作家が矢鱈に書き過ごすと必ず陥りさうな穴にあつさりはまり込んだ駄作。（中略）この作も持前の素直な台所的情感が紋切型で徒らに内容の空疎を露呈してゐる始末である。人物への愛情に燃焼のない壺井栄の小説といふのは、つまらない。」[11]というきびしい批評もでてくる所以はそこにあるのではないか。

「小豆飯」（昭15・10「会館芸術」　長い間初出が不明であったが、文泉堂版栄全集刊行時に猪熊雄二氏の御教示で朝日新聞社の外郭団体から毎月刊行されている雑誌に掲載されているものであることが判明した）は作者自身の実体験に基づく初期の経験を書いたものと思われるが、一般に性を上手に語ることは至難とされ、大抵は読者にいたたまれない気分にさせるのがオチであるが、本編はその点、実に巧みで、用意周到に仕組んだ好短編となっている。この父を援けての材木運びは後に栄が病んだカリエスの遠因となるもので、醤油工場の薪材となるだけに肩にめり込み、骨が折れそうになる重労働で一年半続き、疲労がたまるとぐっすり寝込んでしまい、失禁することもしばしば[12]であったという。そうして不快といらだちを日一日と高め、身体の変調を増幅させて一挙にカタストロフへと持ってゆく手際は中々のものというべきであろう。

「艪」（昭15・10「知性」）は四十歳を過ぎた漁師の茂一は口ごもって話がうまくできないため、漁に出かけるほかは家にこもってしまうので嫁がこない。二度嫁をもらうが二人ともすぐ逃げ出す。そこへ、嫁の話―三十過ぎ、体は小さい、親兄弟もない、苦労してきたという境遇の女を母は二つ返事でひきうけ、来てさえくれればと大歓迎で、嫁が来たらその日のうちに、通帳も株券も皆嫁に渡して家の事はまかせようと決心する。

母一人、子一人のあととり息子に嫁が来ないふびんさ、どんどん年をとってゆく心細さに身をよじる思いの母のあせり―それはよくわかるが、しかしそれは本来息子がすべきものであって母ではない。そこをはっきりさせて息子に人との接触を訓練しない限り、又同じことの繰り返しとなる可能性は大いにあるといわなければならないのだが、そういう公式論をふりまわしてみても、男女間の交際が極度に制約されていた当時としては―今日との違いは歴然としていて当世の若者には理解しにくいかもしれないが、―切実な問題であったといえる。

三

次に、刊行されたのは『**たんぽぽ**』（昭16・4・25　四六判　装幀は松山文雄　高山書院）で、収録作品は、無花果・帰郷・大黒柱・寄るべなき人々・卵・わかれ・船路・柿の木・たんぽぽ（A―小説・珊瑚もの）の九作品だが、「たんぽぽ」は再録であるから初収は八作である。

発表順に見てゆくと**「無花果」**（昭15・11「文芸春秋」）は十歳の

時に母の生家に養女に出された萩乃と、その義理の伯母との葛藤を通して、生涯を蓄財のみに生きてしまった伯母の人生の空しさを剔出し（その点でこれは「海の音」における与平の父、銀六の女性版である）、「**帰郷**」（昭16・1「新潮」）は芸人の男を追って島を出た三十六歳のキクが、男に死別し、娘が私生児の正雄を生んだのをしおに、十八年ぶりに従弟をたよって帰郷するまでを描き、「**大黒柱**」（昭16・2「知性」）ではそれを受け、キクは何とか役場の小使いになれて生きてゆくメドが立ち、有為転変はいずこも同じで、嘗ての村一番の金持が破産して、その屋敷が今は役場となっている。そしてキクは「**寄るべなき人々**」（昭16・1「公論」）でさまざまの不幸な人々—昔羽振りのよかった船長が今は葬式の食べ余りをもらい歩き、書記の秋田は五十近く、五人の子があり、商売に失敗し、帰郷して独身者よりも低い月給で生活している—人々などを描き、「**わかれ**」（昭16・1・1「週刊朝日」）は二十歳のせい子がひそかに愛していた青年教師への訣別を告げに靖国神社へ詣でる話であり、「**船路**」（昭16・2「婦人画報」）は零落した元庄屋一家が家をたたんで島を出るが、その娘の一人が金持の家の嫁に迎えられて島に戻り、八人の子を産むが再び破産—なまじ家柄の家に生まれた故に悲劇の道を辿る女を描き、「**卵**」（昭16・4「新女苑」）では夫婦相互の不料簡のために、ピンチに陥った家庭の場合を描き、「**柿の木**」（初出未詳。昭16・4・25以前に発表）は、柿好きの新三（小学一年生）の柿の木育ての苦心を描くが、このへんでこの作品集について一往整理しておくと、作品集の中心は島（小豆島と思われる）を出て再び島に戻ってきた〈キクもの〉が中心といってよいであろう。

作者は舞台が勝手知ったる小豆島なだけに、数誌にまたがっての掲載ながら巧みな手さばきで作品を次々とまとめてみせ、その手つきはなかなかに鮮やかである。

職業作家としては一往及第といってよいであろう。同時にこの頃から内外の作家の文学伝統に学ぶ〈文学勉強〉[13]を開始するが、漱石・ゴーリキイ・トルストイなどには「呼吸困難」を感じるほどの「根（こん）のなさ」であった。僅かに、志賀直哉・菊池寛・フィリップらにひかれて熱中したようである。中でも偏愛したのはフィリップ（一八七四～一九〇九）で、小さき町に住む無名の貧しい人々に注ぐ豊かな人間愛に共感した。『母と子』（一九〇〇）、『ビュビュ・ド・モンパルナス』（一九〇一）『小さき町にて』（一九一〇）等の作品の存在があることを知って、所謂学のない栄も、胸を張っておのれの文学のレーゾンデートル（存在意義）を確認できたことであろう。そういう背景があることを指摘しておきたい。[14]

しかし文芸時評はきびしかった。〈N・O「文芸春秋」「文学界」作品評〉（昭15・12「文芸」）は

壺井栄「無花果」　壺井栄の向日性に魅力が失せてきたことは事実である。パセチックな素材を明るく素直な筆致で表現するところに彼女の健康さが産まれたのであるが、最近のものには、克服された人生苦の陰翳が消えて、凡々と暖かい楽天主義に随（ママ）してゐるのだ。つまり誠実味がないのだ。当分の間休養を望む。

はこう評し、『船路』には収められなかった同時期の「柳はみどり」（昭15・9「新潮」）について〈M・M「文学界」「新潮」作品評〉（昭15・10「文芸」）は（前引の引用では部分的であったのでここでは全文を引いておく）

壺井栄「柳はみどり」　この作家が矢鱈に書き過すと必ず陥り

さうな穴にあつさりはまり込んだ駄作。丙午の双生児姉妹を描いてゐるのだが、この素材でも描写でも作者は無気力に女流作家であることに甘へてゐる。勿論女流作家としての発見を追求して行つてよいわけだらうが、女流の垣内に寝そべつた作品は、押しつけがましい情感や綺麗事な人情噺に堕しがちなやうに、この作も持前の素直な台所的情感が紋切型で徒らに内容の空疎を露呈してゐる始末である。人物への愛情に純粋な燃焼のない壺井栄の小説といふのは、つまらない。

として、最近の栄の作品の傾向に対しての批判となっている。

最も簡要に批判の要点を言えば、栄の最近の作品は紋切型の人情噺の上にあぐらをかいたものばかりで、新鮮さがないということに尽きるといってよいであろう。

確かに言われるような傾向があることは否定できない。しかし栄のためにあえて一言弁護するならば、このように十把一絡にしてくくられてしまうと、是非善悪の別無く、用不用の詮議も無く、一括して悪傾向と断じられて葬られてしまう危険がある。

具体的に言えば、〈キクもの〉においては破綻者列伝とも呼ぶべき人々が登場し、「帰郷」「寄るべなき人々」「大黒柱」と連作形式で語られるのであるが、既に指摘したように、これらの作品は秀作ではないが、決して無くてもよいような駄作、凡作ではない。というよりも、島における生活破綻者、困窮者、底辺生活者を追尋してそのパターンを明らかにし、きっちりと整理してみせているわけで、貴重な試みというべきである。

この立場、認識からすれば、〈キクもの〉シリーズは不要、無用、悪傾向の作品などではなくて、よるべなき人々の存在、〈島における底辺史〉を考える上で貴重な一石を投ずる試みとなる作品の筈である。

ところが前引の「N・O」の時評に言う「当分の間の休養を望む」というような無責任な発言が、もし実行されるようなことがあれば、これらの作品がはらむ問題提起そのものが放棄され、埋没されてしまいかねないというゆゆしき事態に立ち至るのである。つまり、これらの中の一人は、役場に向ってはっきりと公的扶助の要請をしているわけで、それが時代の認識よりも先んじていたが故に役場ではいつも一笑に付されてしまっているが、それから数年後の昭和二一年には生活保護法が制定されて公的に生活が保護されることになった。つまり、戦前と戦後の間五年を境にして人権という考え方が逆転したのである。これを如実に示しているのが、〈キクもの〉なのであって、その意味は決して小さくない。

もう一つの例をあげると身体障害者の問題提起がある。既述の「ガンちゃん」は知恵おくれの十歳の子のかかえる問題を、働く母親の立場から提起したものである。同様の趣旨に基づく発言は世間の理解や社会的な影響力を考えて、小説ではなく直接に意見として同時代になされてゆく。それらを二、三見てみると**「不幸な子供のために**（為政者へ望む）」[15]は朝日新聞の「為政者へ望む」のコラムに発表されたもので、「大根の葉」以来のヒロイン〈発子もの〉に関わる、弱視児童ための特殊施設の増加要求を文部・厚生両省にしたものであり、**「特殊児童の作品」**[16]も精神に障害のある子を収容する八幡学園の児童の作品展を見ての感動から、こういう施設がなかったならば「見出されずに終わるかも知れなかった才能を生かし得たことの驚異」を語って「この種の施設の拡充」を訴えたものであ

る。「**点せ愛の灯を**」[17]は東京郊外にある所謂不良少女「娘の家」をルポしてその現実―親達は「家には帰ってくるな」と娘を拒絶するという心情に驚き、その逆に親にまさるものはないのだと力説する。

このように栄は社会的弱者のための代弁を―殊に戦前の日本はあらゆる面で人権意識が欠如していたり、低劣であったために困窮している人に代わって、いわゆるルポルタージュ（略してルポ）や訪問記を多数書いて、その窮状を訴え、問題点を指摘して世間の理解と援助とを積極的に求めたのである。その意味では栄はジャーナリズムの果たす役割やその社会的影響力の大きさについては、早くから認識していてジャーナリズムからの依頼や要請には可能な限り、積極的に応じていてその数は戦前一七、戦後三二本を数える（ルポ、訪問記は全てカウントし、対談・座談については主張の強い一部のものに限定し、論説・評論等は採っていない）。

四

第四作品集は『**船路**』（昭16・12・15　有光社名作選集13　B6判　庫田叉装幀　有光社）で、収録作品は、赤いステッキ・三夜待ち・小豆飯・艪・朝・船路・海の音・廊下・無花果の九作品であるが、「朝」を除いて他は全て既刊の三作品に既収である。「**朝**」（昭15・9「観光朝鮮」）は朝鮮に単身赴任した夫が逞しく日焼けし、精悍な姿で再会したのに新鮮な魅力を感じて惚れ直し、そのあとを追う人妻の心情の変化をたどったもので、可もなく不可もない。素材的には昭和十五年六月に朝鮮総督府鉄道局からの招待[18]で佐多稲子と二人、半月程、京城―開城―金剛山―平壌を旅行した体験が契機となっているであろう。

次に第五作品集として『**ともしび**』（昭16・12・26　博文館）があるが、これは〈克子もの〉をまとめた作品集（収録は　大根の葉・風車・赤いステッキ・窓・霧の街・眼鏡（A―小説・克子もの）なので前稿（拙稿「壺井栄論（14）―第五章『暦』のころ」[19]で既に論じた。

第六作品集は『石』（昭17・7・28　全国書房　B6判　国枝金三装幀　収録作品は　裁縫箱・縁・風（A―小説・光子もの）・一つ覚え（A―小説）・昔の唄・霧の街・ともしび〔これは作品名でこの名称の作品はこれ一作のみ。第五作品集の総題となっている『ともしび』とは無関係である。〕で、七作品が収録されているが、「霧の街」は既収。「ともしび」は児童文学としてまとめて後述する。

「**裁縫箱**」（昭16・12「婦人朝日」）はヒロイン、ヨシノの十二歳の時の母との別れを語ったもので、自らの死期を覚った母が娘をつれて町へ行き、着物を売り、その金で裁縫箱を買ってくれ、うどんやいなりずしを食べさせてくれた上に、メリンスの小ぎれを見つけてヨシノの前掛けにと買ってくれた―それから数日後に戸板に乗せられて母は帰ってきて死んだ。

母一人子一人でかつがつ暮らしているのに、或る夕母に突然町へつれだされて外食し、生まれてはじめてあれこれ買ってもらえる驚きと、不安な喜びが丁寧に描かれた佳品である。

「**縁**」（初出未詳）と「**昔の唄**」（昭17・1「婦人公論」）は同じ素材から作られた作品[20]で、栄自身の実際の経験―娘の頃、大阪道頓堀中座前の芝居茶屋「三亀（サンカメ）」の息子大塚克三と愛しあうが、いざというときになって男は、君に料理屋の女将はつとまらないと消極的

になり、栄の方は未練たっぷり、たとえ料理屋のような仕事でも男から来てくれと一押しされれば飛びこんでゆく覚悟はあったが、男の方が逃げ腰なのであきらめて壺井繁治の方に走った。男は後に舞台装置家として大成し、東京・大阪等の舞台を約半世紀にわたって二千以上手がけ、その間演劇協会賞（昭41）や大阪市民文化賞（昭49）等を受賞している。大塚の死後、遺品の中には栄の戦前に刊行した作品集が多数含まれていたというが、双方共にのちのちまで心に残る恋であったのだろう。

これを材料にして一編を仕組んだもので、両作共に骨子はほぼ同じ。「昔の唄」で友人の作家和子としているのは佐多稲子である。

この件については佐多氏の生前、筆者が軽井沢の別荘に訪ね、詳細を確認しているので簡潔に要点を記しておきたい。[21]

（一）作中の「半分は公の旅行」とは日本文芸家協会主催で昭和15年5月から始まった文芸銃後運動講演会四国班の講師として派遣されたことをさす。この時のメンバーは菊池寛・日比野士朗・海野十三・浜本浩・佐多稲子・壺井栄の六名で、日程は昭和16年10月28日9時東京発のつばめで出発し、29日に高知市城東中、30日は徳島市、11月1日は高松市で休養、2日は丸亀陸軍病院慰問、城北国民学校、3日は今治市公会堂、4日は尾道高等女学校で講演というものであった。

「公の旅行」とはいっても、これは役所がつくった官製のものではない、融通無碍なるところがあったようで、本来この講演会は日中戦争下の時局認識と文芸報国を名目にした全国遊説運動で、日本文芸家協会長菊池寛の発案からなされたもの—もっとはっきり言えば時局に迎合したスタンドプレーからなされたもので、昭和15年5月から、16年12月まで（16年1月～4月を除く）毎月欠かすことなく、関東・甲信越・東北・北海道・中国・四国・九州・朝鮮・満州・樺太と地域別に出身作家を編成して、出身作家によって講演会を開くというものであった。

（二）従ってこの四国班は菊池寛以下全員、ただ一人佐多稲子を除き（佐多は長崎の出身）、四国出身である。では何故、ここに佐多が参加したのかについては佐多に次のような発言[22]がある。それは発案者の菊池から佐多に連絡があって、栄はデビュー間もないので他の作家達ともなじみが薄いから、あなたは別の土地の出身だけれど、栄の連れとして参加していただけないか、との配慮があって参加したものだという。無論、佐多は喜んで承知した。栄からいつも小豆島の話を聞かされて、夢にまで見る程であったから。

それともう一つ。講演旅行が終わってから佐多は栄と二人だけで小豆島へ行くことになるのだが、ここにも菊池の配慮があったという。それは小豆島での講演は日程にないのだが、講演をしたことにして旅費や講演料を出してくれたからである。まさしく文壇の大御所と呼ばれ、苦労人と言われた菊池の配慮のこまやかさの面目躍如というべきところであろう。

（三）氏は、栄から繁治氏以外に恋人がいたことは確かに聞いた。前述の文芸銃後公演で四国へ行くときに、途中一行と離れて大阪で下車するからと氏も同行をもとめられ、ついてゆくと、ある劇場の前に行き、そこで栄の恋人の芝居が今上演中だと言ってその前を往ったり来たりするのでびっくりした。繁治氏という夫があるのにそういう行動に出たことで面白い人だと思ったが、その人の名はわからない。ということで、「昔の唄」と「縁」の二作（もう一つ「平

凡」に連載した読切小説「ペンペン草の歌」昭33・7　にも同様のストーリーがあるので、厳密に言えば三作は同一の根から出た作品である）に述べられていることは事実であることが確認できるのである。

「風」（A―小説・光子もの）は初出の際の原題は「柳に吹く風」（昭16・5「日の出」）。同様にヒロインの名前も咲子から光子に変わる。

東京に嫁した姉が早産で花枝を産んで死に、お産の手伝いに行っていた光子が郷里に連れ帰り、育てる。恋仲の正造は出征するとすぐ戦死し、義兄の元次郎からは花枝と二人で来てくれの催促―何をバカなと反発するが、一年二年とたつうちに恋人の死が実感され、思い出が薄れてゆき、花枝にひかれる心で動いて行く―娘心の微妙なところ、すっかり母心を開発されてしまってもはや娘だけの心にはもどれない光子の心中を描いて巧みだが、何分にも作品が軽い。

「一つ覚え」（A―小説）〔昭16・4「新興婦人」〕は偏屈な漁師が隣家の五人の娘達に次々に求婚し続けるが全部ことわられるコント風の作品。

池田小菊の斡旋と表題の由来　第六作品集『石』が刊行されるについては池田小菊（一八九二～一九六七）の斡旋があった。小菊は和歌山生まれで小学校の教師をしたのち、奈良女子高等師範で教えるが、小説への関心が深く、志賀直哉との出会いが決定的となって教職を退き、作家生活に入る。代表作に「奈良」（昭13・11「文学界」）、『かがみ』（昭17・8　全国書房）などがある。

この小菊が大阪市南区にあった全国書房の経営者田中秀吉に「女流作家叢書」の人選・執筆を依頼され、推進役となり、まず栄に声がかかり、これに対して栄は一、二ヶ月内に原稿を渡さなくともよいという条件なら引き受けてもよい。[23] 網野菊、窪川（佐多）稲子の場合はまず栄が話し、それから小菊に会って条件を出しあってからきめたい、栄の場合は今年はダメで、来年の三、四月位ならOK。[24] 装幀の候補者として国枝金三ならば大賛成で、ぜひお願いしたい、今度「婦人朝日」（昭17・2～7「夕焼」）に〈小豆島もの〉で連載小説を書くことになって挿絵は鈴木信太郎になったのだが、氏は小豆島に一度も行ったことがないというので、どうなることかとあんじているので、できることなら多少とも縁故のある国枝氏にお願いしたい、[25] 等とあり、その間小菊と急速に親しくなって奈良を訪ね、東大寺や法隆寺を案内[26]してもらい、17年6月22日付書簡では『石』の「あとがき」を送った旨の記述があり、同年7月28日全国書房発行となる。

そのあと、「夕焼」とその続編（のちに「海風」となる）も全国書房では欲しかったようで、社長の田中は栄に前借までさせていたが、栄と田中との間には金銭面での行き違い―たとえば、以前田中社長は「夕焼」の書き足した分の稿料は別に出すといっていたが、今はうやむやになっているし、また発行部数も最初の言とあとでは違っている等々のことがあって[27]（無論これらは栄の側からの一方的な言分であって、田中氏側からすれば反論はあるであろう）嫌気がさし、栄は全国書房との縁を断った。

ちなみに、この時刊行された女流作家叢書は次の六冊である。

池田小菊『来年の春』（昭16・12・15）網野菊『若い日』（昭17・3・10）中里恒子『家庭』（昭17・5・15）栄『石』（昭17・7・28）窪川稲子『気づかざりき』（昭18・2・20）真杉静枝『母と妻』（昭

18・4・30)。

ところが、人生は皮肉なもので敗戦後の混乱期の中で、栄は方向が見出せない中で、甥の子を押しつけられて育てる破目となり、更に実の妹シンの思いもよらぬ破婚によるショックで数年間寝込み、併せて更年期障害も加わったようで、貧・病・苦の中にもがいていた。そこへ小菊からの来信—『石』の再版許可願い。二つ返事でOKを出し、書かずもがなの事まで書き足している—妹の結婚のことをあれこれ書き(流石に名前は出していないが「あなたも御存じの文壇人」とその寸前まで言っている)「五千円くらい至急にほしい」と以前とは手の平を返すような一コマもあった。

最後にもう一つ、『石』というタイトルについてふれておきたい。栄に「石」という作品があってつけられてものではなく、夫である壺井繁治の詩にちなんでつけられたもので、本の扉にそれが次のように記されている。

石

石は
億万年を
黙って
暮らしつづけた
その間に
空は
晴れたり
曇ったりした

付け加えれば、この詩は繁治の死後、小豆島の生家の裏手、分教場の跡地に建てられた詩碑に刻まれている。

五

第七作品集は『女傑の村』(昭18・7・26 実業之日本社 B6判 松山文雄装幀 収録作品は 女傑の村(針 家 磁石) 垢坂下咲子 牛のこゝろ 同い年 五目ずし 名づけ 木の葉のやうに 剪定鋏 三界一心)で十作品が収録され、全部初収。

「女傑の村—物語三つ」(昭16・8「文芸春秋」)はサブタイトルが示すように、島(小豆島と思われる)を舞台に「針」「家」「磁石」の三つの短編から成る物語である。「針」は隣り合う本家と分家の嫁同士の意地の張り合いを批評的に描いて笑いをさそい、「家」は夫が借金を作って蒸発したために、妻は家屋敷を失い、掘立小屋に住んで三〇年、やっと念願の家を建てた直後に死に、そのあとには夫が住むというもので、物質のために生きる人生のむなしさを描く。「磁石」はこの島に多い、船員の妻たちの手柄は子供であるために、教育ママの典型になっている彼女たちの言動を、新任教師批判の中に描いて辛辣である。村人列伝、島人列伝であるが、いずれも批評的意識が強くなってきているところに、以前のものとの違いが見られるようである。

「垢」(昭17・3「現代文学」)は夫に赤紙の来た夫婦(妻は妊っている)が、一夜湯河原でゆっくりして来ようと電車に乗ると殺人的な混みようで、七〇あるいは八〇を越したかと思われる老夫婦が、混雑の渦に巻きこまれて互いの名を呼びあって乗れたかどうかを確認し、安全を確かめるのであった。それを聞いて一部の乗客はひやかし、笑うのであったが、老夫婦は真剣に何度も呼び交わして確か

め「笑ひどころじやない、こちらは気が気じやない」という老人の言葉に笑いは静まる。夫婦は「いい老人夫婦だったな」と感動しながら、温泉に向う。

この夫婦、恒子と大吉は結婚して四年とは言え、縁談がととのったところで赤紙が来たために大急ぎで式だけあげて恒子は三年間留守を待ち、夫と一緒に過ごした年月は一年にも足りない。そして漸く子供をみごもったところで夫は「再度の召集」なのである。

赤紙一枚で夫婦を引き裂き、親子の間を切り裂くこの無惨な現実への無限の恨み、無限の悲しみが恒子の胸中にはこめられている。その胸中深く秘められた叫びが電車内での老夫婦の、必死の悲痛な叫びとなって噴出したものにほかならない。老夫婦は物言わぬ大衆のシンボルなのだ。ここまで言えば明らかなように、この作品は容易に戦争批判や反戦小説として批判され、摘発されるシッポを周到に隠して体制内の隠れ簑に納まっているのだ。既に見た「海の音」に続く二作目の反戦小説である。

この作品には大井広介の絶讃[28]があり、その歴史的意義にまで及んで間然するところがない。

壺井栄の「垢」は「現代文学」昭和十七年三月号に掲載された。「現代文学は」井上友一郎を編集担当者とする同人雑誌で、私などが出版の相談相手になり、広告などサーヴィスにかいてやっていた関係で、大観堂が発行所を引き受け、私以外の人には、たしか一枚一円、形ばかりの稿料を払っていた。

同じ号には、同人だった坂口安吾が「日本文化私観」をかいている。（中略）同じ号の同人の山室静の「文芸時評」も大文章である。（中略）

前年の十二月八日、太平洋戦争に突入し、他の雑誌の同じ号は、すべて血迷い、常規を逸し、神がかりになっていたなかに、「日本文化私観」の何処に時局の影響が見出されるか、ほかに山室のような大文章をかいた時評があったか。こういう雑誌が一つでもあったということは、なお日本の自由な文学者の健在を示すに足ると思う。

なかんずく、壺井栄が寄稿してくれた「垢」は、十二月八日以後の、十七年三月号という段階では、他のどの小説家もかかなかった短篇として、感銘が深い。十七年にどんな作品が出たか、調べてもらえば、私の感銘した所以が理解されるだろう。この時、この一作によって、私は壺井栄を尊敬した。信用している。

没義道な戦争に、赤紙一枚でかりだされて行き、人間的なものと、無惨にひきさかれることへの、悲しみを無限にこめた短篇である。憤りや、はらの底の抵抗感を、十七年三月号という段階で、取締の官憲が眼をとんがらしている時期に、それを通過するギリギリの表現で、オブラートにくるんでいるが、しかも読者の同じ口惜しい思いに、ふれないではおかない、短篇の妙味を発揮した短篇である。（中略）

宮本百合子や中野重治には、かかせるなというような内命が、有力雑誌にでて、沈黙を強いられた時期である。（中略）そういう悪環境のなかに、壺井栄が「垢」の一篇をかきとめておいたということは、実に歴史的に貴重なことだ。（中略）

「垢」をかいた壺井栄だからこそ、今日の地位を獲得できたのだ。素性のいい大衆を読者層にすることができたのだ。

「坂下咲子」（昭18・1～6「職場の光」〔一説に誌名は「日本女

性の光」とも）初出未確認）は島（小豆島と思われる）育ちの咲子（さん子と作中では呼ばれる）は燈台守の父（妻と三児が既にある）と島の娘カツとの間に生まれた私生児で、カツの妹として入籍され、赤の他人で他国から流れて来たおふさを祖母として育てられるが十四の時に死別。以後は醤油屋の御寮人にひきとられ、みこまれて杜氏の青年を紹介されて結婚を決意するまでを描く。ヒロインの、幼児から三十までの間に起こるさまざまの問題―主なものをいくつかあげれば、父は？　母は？　姉は？　という疑問から始まって働くことの意味と意義を身体で身にしみて覚え、考え方の問題としては「私生児」が問題ではなくて、どう生きるかが問題というふうに、咲子の成長過程をたどった人間形成小説といってもよいかもしれない。あるいはこれまでに検討した文脈にそって言えば、老人としてよるべないのではなく、幼くてもよるべない人を如何に導き、育てるか、という問題をあつかった作品と言ってもよいかもしれない。

その意味で極めてまっとうな作品であるのだが、（一）父母の結びつきはどうだったのか、妻子ある男とカツがどうして結びついたのか、（二）今、カツはどうしているのか、というような問題が放置されたままである点などに、作品としてのルーズさがみられるようである。

「牛のこころ」（昭17・9「新潮」）は〈克子もの〉の終りの方の連作で新しく生まれた第三子が遺伝性のソコヒで手術の準備をしたところ、思いがけず風邪から消化不良へと進んで短い生涯を終えたことが語られていたが、これはその一家をモデルにした話[29]である。

ただし、これまでにも述べたが誤解のないようにもう一度言っておけば、一家は夫婦子供四人、父親は農学校の新任教師という程度にモデルがあるだけで他は殆どフィクションである。一家は栄の妹一家でその夫、戎居仁平治は繁治の甥であり、妻の貞枝は栄の妹である。仁平治は早稲田大学の英文科に学び、在学中に繁治の許に出入りして左翼の活動をしていたために卒業後定職がなく、ために妻は小豆島にあって二人の子供をかかえて編み物で生計を立てていた。そこへ新潟の高田から話があり、次いで埼玉の熊谷へと転勤になるのである。これはモデル一家の実情で、作品では高田ではなく小豆島の女学校から転勤したことになっている。

さて作品は、島から来た浩一一家がはてしなく広がる関東平野になじめず、落ちつかず、不安がっていたが、夫は連日、トマト・胡瓜・豚肉・ソース・卵・水飴・ハム等いろんな物を学校からの製造品として持ち帰るのに直子は感激して学校参観までしてしまう。乳牛の一頭が食べすぎてガスを出してやるまでの苦闘や、係の人達が寝ずに飲まず食わずでの献身をするのを見て直子は感動する。

関東平野の広さと農学校という場所を初めて見た驚き、珍しさから、ひとかわむけて一段階深いおつきあいに入ったおちつき、安心感とでもいうべきものが漂っている作品といってよいであろう。

「同い年」（昭17・7「中央公論」）は表面的に読めば、作家のミネ（42歳）が帰郷した際の郷里の反応（「出世しておいでるんじゃ」）という老婆の言動と同級会の楽しみとを淡々と綴ったものというふうに読めるが、しかし作者の本意・真意はそんなところにはない。

では何を、どう描いているのかと言えば、これは戦後に故郷小豆島への呪詛をあらわに書いて驚かせた「まずはめでたや」（昭30・1「文芸春秋」）の先蹤であり、前走者の役割を果たすものである。

物語の発端部で、小学生の時ミネの家が左前になり、彼女が夕飯

一食の為に子守をした中井家の老婦人が再会したミネに「みいさん、あんたはまあ、東京で出世しておいでるんじゃ云うて」「絹子も、あんたのかいた本を買うとったわな」といってほめてくれたのに対してミネは鋭い違和感を覚える。何故ならミネの村で「出世をした人たち」というのは「貧しい中から独学で外国通いの船の船長となり、数万か十数万かの金を貯め」た人、「一代で巨万の財を築いた建築請負師」「アメリカへ出稼ぎにゆき、富を抱えて帰った人」等々、をさしてしか「出世などという言葉をあてはめはしない風習」であって「大学教授や陸軍中将」は「出世」としてはあつかわれないのであった。

つまり村人にとっての、唯一絶対の価値基準は「お金」で、その蓄財者が「偉い人」であり、「出世をした人たち」であって、それ以外の作家や学者などの文化人では銅像や記念碑は建たない「出世」なのであった。

中井老婦人というのは亡母と同年で、ミネの家が左前になり、小五の時から卒業までミネが中井家の絹子の子守となって夕食一食分の家計を助けたという経緯があり、その後絹子は女高師を出て女学校の教師をしていた関係でミネが小説を書いていることも知っていて、それを母である中井老婦人に話して聞かせたのである。

しかし、「ミネのこの『出世』を知っているのは、村でもそう沢山いる訳ではない。」だから、お祝いを言ってくれる人も中井老婦人の他には作品中には登場しない。まして帰郷を記念して祝宴をなどと言い出す人もない。

ところがである。一夜明けた翌日、料理屋の奥座敷に呼ばれたミネは吃驚する。食料は統制され、配給されている時勢なのに、「嫁入りでも当節こんな御馳走はめったにない」料理が並び、「大きなはんぼには五目ずし」がつまり、「酒の用意」まで出来ていてまるで夢の中にでもいるようであったからだ。

それは村に残っている同級生たちが、ミネの帰郷を待って開いてくれた同年会なのであり、作家としての活躍を祝ってくれるものであった。会するものは八人、少数ではあっても心のかよいあう者同志の宴は尽きなかった。

ここには明らかに栄の演出があると言ってよいであろう。村や村人の公認の「出世」ではないが、それに代るものとして同年齢八人の祝宴がセットされているからである。

「五目ずし」（昭17・10「オール読物」）は23歳の貞子が、夫の戦死、義父の病死と相次ぐ不幸の中で、姑と赤ん坊をかかえて自活の道を探し、軍事保護院のアドバイスで電話交換手になり、家もたたんで六畳一間の遺族母子寮で生活を始めるまでを描く。

栄の作品では五目ずしは切っても切れぬもので、それを使ってこの作品では、舅と夫と二代に亘ってのすし好きのすし談義が前半の読ませ所であるが、後半は軍事保護院の宣伝紹介に終わる国策協力小説になっている。

「名づけ」（昭18・7以前）は実話で妹の第四子の名づけに長男の研造が第一候補の直吉は反対と言い続けるが、決まるとあっさり近所にフレまわる、というもので、子供なりの美学からの真剣さが現れている点（直吉では丁稚か小僧のように思われるのであろう）におもしろさがある。

「木の葉のように」（昭18・7以前）はイツが夫に死なれてあとに二十歳過ぎの加代子を頭に三人の娘を残されるが、三人ともに年

頃になると母と衝突して家を飛び出す—それは彼女が〈成長しない母〉の典型で、卵を抱いては育てるが、ひよこや親鳥になるのをみとめないからである。

「**剪定鋏**」(昭17・2「婦人日本」)は女学校を卒業して年頃になった一人娘の文枝が隣りの畑の喬を好きだが、共に一人っ子同志でどうにもならない。やがて高商出のサラリーマンの縁談が来て父は即決の勢いだが、母と娘は悩んだ末、縁談を受け入れる決心をする。戦前の家中心の結婚故に起きた悲劇。

「**三界一心**」(昭16・10「文芸」)は若い日の一時のあやまちが女の一生をいかに狂わせるか、そのことが男に頼って生きる女を作らせるが故に、男と生別、あるいは死別すれば、生きるために結婚を何度でも繰り返さなければならない、情無い女のあり方を花枝の生涯を通して追求しようとした作品で、もし作者がこのテーマ—男によりかからなければ暮らしてゆけない無力な女の一生、そしてまた、よりかからせるものを持って、女を一層無力にさせる世間のからくりの恐ろしさを、もっと緊密な構成をもって鋭く剔出したならば、秀作となったことは間違いない作品であるだけに惜しまれる。

六

次は第八作品集『**夕顔の言葉**』(昭19・2・20 紀元社)第九番目に刊行の『**海のたましい**』(昭19・6・14 大日本雄弁会講談社)所収の作品であるが、これらは栄文学の中で、小説と並んでもう一つの重要なジャンルを形成する児童文学に属するものなので、あとでまとめてとりあげることにしたい。

次は第十作品集『**花のいのち**』(昭19・7・25 葛城書店 四六判 松山文雄装幀 収録作品—花のいのち(A—小説) 音のゆくえ 提灯 柳はみどり 花ひらく 俎板の歌(A—小説・正子もの))。六作品を収めているが、「柳はみどり」は再録で、『祭着』に既収。

「**花のいのち**(A—小説)」(昭18・7〜12「青年女子版」〔昭18・7〜10までは初出確認済みだが、11月〜12月は推定で未確認。〕)はその頃転居先の鷺宮で知り合った櫛田ふきが勤めていた雑誌に連載したもので、ふきは経済学者櫛田民蔵の未亡人で、戦中に栄や佐多稲子・宮本百合子らと知り合ったことが戦後のめざましい婦人運動、平和運動への活躍のきっかけとなる。主な役職として、婦人民主クラブ書記長、同委員長、婦団連会長など。

作品は小豆島の自然を背景に、青年学校女子部に学ぶ若い娘たちの群像と、若い女教師との交渉を通して卒業前後の知事賞受賞をめぐる軋轢、卒業後の恋の鞘当、片足のない傷痍軍人と結婚する娘、軍需工場勤務の娘など、銃後の勤労風景を織り交ぜつつ、若い娘たちの群像を描こうと試みたものだが、根本の認識が〈女は嫁に行き、子供を育てるのが本当〉という限界を一歩も動かないために、古風で従順、伝統的な女性の再生産に終わったと言ってよい。

「**音のゆくえ**」(昭18・1「婦人公論」)は何不自由ない小豆島の寺に育った二十歳の一人娘の南枝が、東京鷺宮の寺で鐘の献納式に出会ったことから、一念発起して来年学校を卒業したら、今の時代に即応して学校の先生になって働こうと決心してそれを伝えに島へ帰るまでを描く。緊張した文体でゆるまず書いていて、その限りでは動機も決意も若者らしく一途で純粋、好感が持てるのだが、〈時

代への協力〉としての学校の先生というところに限界があろう。当時の教師は戦争協力の先兵であり、宣伝隊、煽動者の役割を負わせられていたからである。

「**提灯**」（昭18・1「青年女子版」）は青年学校女子部に学ぶ英子が産業報国、女子挺身隊の宣伝と勧誘の話を聞いてまっさきに手をあげて参加する話で、行先の製樽工場は、全部機械化、工場化されているのに驚き続けるというもので完全に国策協力小説となっている。「**花ひらく**」（昭19・7以前）は女学校を卒業したら結婚する筈だった千枝が破談となり、落ち込むが親友の世話で軍需工場の事務ではなく、現場勤めを始めて「自信と誇り」をもつまでの数ヶ月を描く。ここでは国策への協力が露骨で、特に女子でも事務ではなく、工場の現場への参加が奨励され、家庭菜園作りも積極的に勧められている。

「**俎板の歌**（A―小説・正子もの）」（昭18・8・22「週刊毎日」）は母の死後、再び夫に死別した女中のハマにもう一度もどってもらう事を娘が父に了解してもらう話で、無論ハマが家に入ることは後妻になることを意味する。その点でこの作品の人物の出し入れにはご都合主義の面があることは否定できないが、その事が気になるよりもむしろヒロイン正子の明るさ・積極性・行動力の方に読者を引きつける魅力があろう。

七

第十一作品集は『**絣の着物**』（所収作品は不明）で満州の毎日新聞社から「昭和17～18年ごろ」発行されたというが、大陸での発行のため作者の手元にもなく、入手の協力を「週刊新潮掲示板」[30]で読者に依頼したが反応はなかった模様で、筆者も未見である。栄は「短編集」と前掲の「掲示板」では記しているので、その収録作品の内容は不明だが、表題になっている「**絣の着物**」（昭19・4「文芸読物」についてのみふれておきたい。

この作品は冬子が作った絣の着物を愛用していた一人息子の太郎が学徒出陣の直前に肺炎で死に、その後訪ねてきた甥の中尉に着せると喜ぶので持たせると、間もなく戦死でもどされ、姪にモンペにでもと与えるというもので、絣の着物にまつわる悲しい歴史が語られる。

作品のテーマが絣を愛した二人の若者の追悼であるから、話はどうしても暗くなり、志気は上がらない。そこでそれを忘れるために二度目の隣組長を引受け、冬子は「熱と誠意」を尽くすのだが、いつも考えるのは若者二人の事というわけで、いつまでも二人の死を引きずっていることを冬子は隠さない。その意味ではこの作品は戦争協力、戦争讃美の国策小説とは逆に、私情を吐露した母子情愛の小説である点で異例である。

『絣の着物』と同様の運命をたどったのが『**海風**』（昭20・5河出書房刊予定）で、空襲により配本直前の5月25日に見本一冊を残して焼失したと言う。残念ながら今日、この本は壺井家に残されていないので筆者も未見であり、その意味では「幻の初版」である。「**海風**」（初出未詳。栄の記憶に寄れば昭18・10～12「日本女性」連載）[31]は「夕焼」（昭17・2～7「婦人朝日」）の続篇であり、栄にとっては最初の長編小説であった。その間の経緯については朝日新聞社出版局「婦人朝日」の編集部にいて担当者となった渡辺綱雄「壺

井栄の処女長篇小説」（昭61・6・5「芸文東海」7号）が最も詳しいのでそれによると、栄の起用は日米開戦を目前にして予定していた阿部知二に急に穴があいて（連載小説の第一回を発表しただけで徴用となった）、そのピンチヒッターとしてではあったが、編集部内にも短編作家としては問題がないにしても、長編は見ていないだけに果たして書けるのかと危惧する声も強かったが、ではネームバリューがあって、短期間に、半年連載で三百枚の小説を書いてくれる作家が他にあるかとなると声がなく、結局栄に依頼することとなって渡辺が使者に立ち、話を聞いた栄の方でも「さあ、私に長編小説が書けるかしら」と即答は避け、数日考えてから決断したものであったというのが執筆に至る経緯である。

ところで作品は故郷の小豆島を舞台に、島の男たちの生きる夢は船員であり、女たちは彼らの妻となることで、その間のドラマを追及している。即ち、女の幸福とは何か？、女にとって一年の殆どが夫との別居になる船員の家庭は本当にしあわせなのか？　夫婦が一つ家庭に住めない結婚はふしあわせではないのか？　等々が姉妹、親子、恋人間でなまなましい現実の問題として提起され、議論される。

物語としては、従順でおっとり型の長女松代が正月の挨拶に来た父の教え子省太郎とあっという間に結婚させられ、一緒に暮らしたのは五日間、妊娠とわかるが四ヵ月後には遭難で死別という悲劇から始まり、松代は婚家を出て実家にもどるのか、それとも夫の霊を守ってそのままとどまるのか、生計はどう立てるのか、が焦眉の問題として議論される。ところが、従来、従順で内気でぼんやり派と見られていた松代が、周囲の驚く変身を遂げ、津々木家の主婦として、生まれてくる子の母としていささかの迷いも動揺も無く跡を守り、生計は養鶏によって立てることとし、資金は保険その他からの三〇〇〇円の中、九〇〇円をこれにあてるという資金計画まではっきり示してびっくりさせる。一方すぐ下の次女竹乃は才気煥発、はっきり物を言うタイプで姉の結婚をさんざん批判して松代にとうとう「私馬鹿かしら」と言わせる程だったにもかかわらず、恋人のシアトル航路の高級船員秀一からプロポーズの手紙が来て父から意志を確認されると、平素の言動とは全く逆に、父母の「哀願」（長女の夫津々木省太郎の遭難死によるショックで船員はこりごりの心境にあった）を忖度して「お断りして下さい」と本心を裏切った宣言をして家族を唖然とさせるのである。

この姉妹二人の対比的な言動が作の中心となるのであるが、姉のそれは直線的でわかりやすいのに対して、妹のそれは屈折している分モタモタしているのと、議論がスムーズに進行しない憾みが残って、結局連載予定の六ヵ月では完結せず、初出誌の最終回末尾には「（前篇終り）」という断わり書きがつくことになってしまった。

それから約一年後に後篇となる「海風」が書かれて完結した。

松代は17歳になる直江と二人暮らしで、女学校を卒業したら婿養子でもとって孫と暮らすのが楽しみだが、娘は働きたいと主張し、郵便局に勤める。同僚の和田は切れ者で三人前を一人でこなす程だが、人柄がよく何でも教えてくれ、姉の様に思う。五男七女の貧しい農家に育ち「きょうだい喧嘩は餅よりうまい、精出して喧嘩せえせえ。」と育てられたことを楽しく回想し、商船学校出の弟（学資は彼女が出してやり、今年24歳）と結婚してくれないかと切り出す。

前篇と違って舞台が郵便局内に限定され、殆どがヒロイン直江と

同僚の和田との対話になっているのでこぢんまりとまとまってはいるが、「夕焼」より格段にパワーが劣るようである。

八

敗戦後の刊行になるが、もう一冊『**松のたより**』（昭20・12・15飛鳥書店　A5判　装丁の記載なし　収録作品―松のたより　藪がらし　特殊衣料配給日　大阪の塩　絣の着物　母を背負いて）も見ておきたい。収録されている殆どの作品が戦時中に書かれ、発表されたものであり、「あとがき」によれば「校正にあたつては、気になる部分にもわざと筆を加へないでおいた。」とあって、これを信じれば、戦後になってからの不都合、訂正、変更などは加えていないということなので、これまで本稿でとりあげてきた作品と同一平面上でとりあげるのが適切と判断[32]したからである。六篇収録の中、再録は「絣の着物」一篇のみである。

「**松のたより**」（昭20・12月以前[33]）は小豆島のタコの一本松をめぐっての小学校教師朝子の半生の思い出を描き、敗戦一ヵ月後にはタコの一本松も嵐で折れてしまった次第を姉に知らせるというものだが、古色蒼然の趣は否定できない。その理由は恐らく次のようなことと思われる。このモデルは文泉堂版壺井栄全集3の解題にも指摘したように、履歴から見て明らかに栄の妹シンであり、しかもその追想が現在や未来につながるものとしてではなく、過去の単なるセンチメンタルな回想のレベルにとどまっているからであろう。

「**藪がらし**」（昭17・11「文芸」）は郊外に我家が建つまでに、髪の毛が三本になりそうな辛い思いと築後の藪がらしとの闘いをスケッチ風に描いた小品で、この題材は繰り返し以後とりあげられる。

「**特殊衣料配給日**」（昭20・1・7「週刊毎日」）は小豆島が舞台と思われる店での販売風景を描いたものだが、個々のケースに着目してみれば、欲しい人にクジがあたらず、不要の者にあたる不合理さ、大金持ちが金の威力で、理不尽に切符を入手して品物を手に入れる不正や、統制切符販売がいかに不便であり、並ばされ、待たされるものか、等々が克明に描かれていて、宛然一篇全体が統制切符制度批判になっているとも見られる。その意味で「特殊衣料配給日」は既に検討した「垢」「絣の着物」などと並んで、お上のすることには唯々諾々と従ってきた中から、ほんの僅かではあっても、「ノオ」と言ったり、「これではイヤだ」と言ったり、「こんなことが許されてイイのか」「息子と甥と、二人とも若者を戦死させられてはどうやってこれから生きて行けばよいのか」という庶民の声をメッセージとして発信していたというのは、本土決戦が叫ばれていた時代だけに、誠に貴重なものとして記録しておかねばならない。

「**大阪の塩**」（昭20・12以前　脱稿は「（昭和十九年十一月）」）は勤めをもつ母と息子、家事担当の娘（二十歳）の一家に、久しぶりに砂糖の配給があって、母は故郷の小豆島での思い出を娘に語る。隣家のおばさんが砂糖を子供たちに見つけられて大阪の塩だと言ってうまくごまかしたという。やがて警戒警報がなり、防火用水の氷割りから帰宅した娘は「警報が解除になったら大阪の塩よ。母さん！」配給制の中でのささやかな喜びの一コマである。

「**母を背負いて**」（初出未詳。脱稿は「（昭和二十年七月）」）は私と渡辺、黄江子の三人は女学校四年の仲良し三人組で軍需工場に勤労動員されている。空襲で渡辺の家が焼かれ、足の悪い母を背負っ

て辛くも逃げるが、読書家の彼女は本が焼けてしまったのを残念がり、それを聞いた二人が苦労の末古本を入手して渡辺に贈る。その夜母を背負うとその軽さに驚くというもので、この作品での作者の狙いは、本を入手する過程で知った、本屋に本がないと言う現実と、たまたま本を売りたいという新聞広告を見て出向くと、岩波文庫をお金ではなく、米か小麦粉との物々交換でなければ譲らないと言う御仁がある一方で、それとは全く逆に、足許を見て安く買い叩く古本屋に腹を立て、二人から事情を聞くと、古本屋よりも更に安い値段で分けてくれる人もあったという、戦時下の世相の一端を提示することにあったと思われる。そして何よりも痛烈な批判は、「本はやせないけど、人間はみんなやせて軽くなったわね。」にこめられているのであろう。表題が啄木の著名な短歌に拠ることは言うまでもない。以上で『松のたより』収録の作品については全て検討したことになるが、次に単行本未収録の戦前の作品を十作程新たに発掘したので[34]以下にざっと見ておきたい。

九

「種」[35]（昭16・3「文学者」）は昭和八年二月に特高の手で虐殺された小林多喜二の母を描いたもので、栄は多喜二の遺体を清めた一人である。多喜二の命日前後に、毎年母が北海道から上京して、息子の曾ての同志達に手作りの土産を振舞う、無垢の慈愛の姿を描いて感動的である。しかし、その母を囲む会も参会者が年々減り続けて、気の毒になるような状況と人情の変化が痛苦の感情でとらえられており、この母の姿に栄の理想とする母の一つのタイプ—約束を忘れず、疑うことを知らず、無垢の信頼と慈愛を捧げる姿が造型されていると考えられる。かえりみられることの殆どない作品だが、もっと評価されてよい作品である。

「リンゴの頬」（昭17・6「大和（たいわ）」）発行は「鉄道大臣官房現業調査課」）は未熟児で三誕生めに歩いた娘が十九になって結婚話でもおこったら止めなければならぬ程病弱なのに、非常時の時節柄勤めに出たいと言い出して、とうとう幼稚園の保母になって一ヶ月に一度位帰って来るが、みるみる元気になって「リンゴの頬」になったのに驚く、という話で「世の中になくてはならぬ存在なのだ」という自覚が、彼女を別人のように、生き生きとさせたわけで、モデルは姪の真澄[36]でろう。

「鷺宮二丁目」（昭18・1「現代文学」）は戦地の兵隊への慰問文で不適任な所以や、家の位置、福蔵院の鐘の供出などの、鷺宮だよりを記したもので、話題にいくらか作家らしい目新しさ（子供同士の会話など）がないとは言えないが、結論的に言えば、作家としての良心を痛める程ではない程度の戦争協力というべきものであろう。**「軍艦献納」**（昭18・5「婦人公論」）も同様に国策協力で、子供の新ちゃんが父の形見の赤銅製の軍艦を写真にとって供出したい、そうすれば船を作る釘になると供出を申出る話で、これは久米正雄[37]（日本文学報国会代表）によれば「日本文学報国会小説部会の発案」で「原稿紙一枚」で大政翼賛会の「建艦献金」の運動に協力する「小説・檄文」を募集し、集まった二〇七篇中の一篇だということで、のちにそれらは全て日本文学報国会編『辻小説集』（昭18・7・18 八紘社杉山書店）に収録された。子供たちの玩具まで供出させてとりあげるというレヴェルの点で抵抗がないわけではな

いが、よく考えてみれば、大の大人が「協力」に知恵を絞った結果がこの程度であったということからすれば微笑を禁じえないであろう。

「**簞笥の歴史**」（昭18・1「新女苑」）はミネとタンスとのかかわりを描いた小説だが、とりわけ印象的なのは、ミネの幼時に一家が破産して引越すときに、タンスの環がせわしくカタカタ鳴る音である。それを起点に父母や一家の記憶が一斉によみがえり、往時の貧しい、だが懐かしい風景が思い起こされる点で、詩的喚起力を強く秘めた作品である。

「**客分**」（昭18・4「新潮」）は男女のもつれからの別れを女の立場から、女を被害者として執拗に描いたもので、戦前の栄にはこうした愛欲と物欲に狂った男女をシリアスに描いた作品はないだけに、異色の作品である。ただし、八年間同棲して47歳となった夏江が、同じく39歳となった愛人の古田を、色欲と打算のエゴイストとして一方的に断罪し続け、非は全て男にありとするのは如何であろう。そのエネルギーとリアリティたるや、すさまじいものがあるが、このように一方的では男女の生活は成り立たないからである。シリアスではあるが、欠陥があるという認識がその後この作品の再録を望まなかった理由であろう。

「**掌**」（昭19・1「文芸」）「**霜月**」（昭19・2「文庫」）共に隣組から出征した兵士への慰問文で、しかも隣組の動静報告をしているが、それには明らかなフィクションもまじっていることをこの際はっきりさせておきたい。即ちそれは戦場の兵士にとっては戦意高揚であり、銃後の国民にとっては、鼓舞激励をめざすものであってみれば、文章のプロに要請して要所適所にフィクションを配して効果的な一文を期待することは当然だからである。そういう実際的・実務的な用務を帯びたものであるという認識が必要とされよう。一例をあげれば、「掌」では女子青年が樽工場で勤労奉仕をして得られたお金で花かんざしを買ったとか、四月からは引続いてそこで働くようになったとか、書かれているが、そのような事実はない。また、「霜月」での四人家族というのも、英吉（11歳　航空兵志望）は実際にはいない。

「**勝つまでは**」（昭19・4・20「文学報国」23号）のタイトルの右には「決戦非常措置短編」と銘打たれ、末尾には「（大政翼賛会委嘱作品）」とものものしく記されていて、大戦末期の状況を露呈していよう。この作品は田口松子一家の耐乏生活―松子流に言えば簡素生活のあれこれを紹介し、更に女学生の娘には「つぎはぎのものを身につけて学校へ通った。そして学校を卒えるとすぐに挺身隊に入って、工場で働いた。ということは、あんたたちの一生を飾るものなのよ。」と説いて得心させ、一家の戦争協力を推進させるものとなっている。栄が書いた戦争協力の作品の中では最も露骨に協力の意図が出た作品といってよいであろう。

最後に「**馬糞**」（昭20・1・10「文学報国」44号）はそれにまつわる三題噺めいた体裁で、窮迫した首都東京の食料事情の一端が家庭菜園に支えられ、しかもその肥料は馬が道に落とすものであるとは！　大らかな笑いに包んで、執筆依頼者側の姑息な〈国策協力〉の企図を吹きとばして壮快である。

さて以上で戦時下の栄の作品の検討のうち、小説については一通り終えたが、更に総括と、それから栄の文学のあと半分を形成する児童文学が手つかずに残されており、また、エッセイやルポにも目

を通さなければ十全の評価は期しがたい。しかし、それらについては本稿が既に約束の紙数も尽きたので、次稿で検討することにしたい。

（この章未完）

＊　＊　＊

① 栄作品の引用にあたっては文泉堂版全集に収録のものはそれに従った。

② 右に未収録のもの及び栄以外の者の引用については、漢字を新字に改めたほかは原文のままとした。

③ 年月日の表示については原文のままとして統一しなかった。99以前については19が、00以後については20が、省略されていることは勿論である。

注

1 大森寿恵子「年譜」（大森寿恵子『写真集　宮本百合子―文学とその生涯』76・1・20　新日本出版社）。

2 右に同じ。

3 『内海町史』昭49・3・30　香川県小豆郡内海町　323～326頁。

4 栄「まつりご」（B―随筆）〔昭41・7「婦人公論」〕。

5 注3に同じ。

6 注4に同じ

7 ついでに記しておくと、『祭着』の初版には二種類ある。（　）内はもう一本の方である。(1)奥付の印刷日　昭和15年10月11日（昭和15年10月15日）同発行日　昭和15年10月15日（昭和15年10月19日）。(2)（イ）装丁　鈴木信太郎と明記（記載なし）（ロ）表紙と裏表紙に信太郎の絵あり（絵なし）。

8 栄「子育てが上手だった」（昭15・11「新興婦人」）

9 平野謙「無題」（昭42・6）〔壺井繁治他『回想の壺井栄』73・6・23　私家版〕

10 栄「小さな思い出の数々」（昭31・5・5『壺井栄作品集3柳はみどり』筑摩書房）。

11 M・M〈「文学界」「新潮」作品評〉昭15・10「文芸」。

12 栄「岬」（昭13・9・18、25、10・2　3回連載「婦女新聞」）。

13 栄「私の読書径路」（昭17・11「新潮」文泉堂版全集11所収）同「私の読書遍歴」（昭29・5・17「日本読書新聞」5面）

14 栄がフィリップの文学を好きであったことについては例えば同郷の知人、福井利夫「手紙二つ」（壺井繁治他『回想の壺井栄』73・6・23　私家版）に、「壺井さんはフィリップが好きであった」とある。他に栄「わが文学の故郷」（昭19・3「早稲田文学」）など参照。

15 栄「不幸な子供の為に」（昭15・2・2「朝日新聞」5面）。

16 栄「特殊児童の作品」（昭14・12・13「朝日新聞」6面）。

17 栄「点せ愛の灯を―『娘の家』訪問記―」（昭15・7「婦人朝日」）。

18 佐多稲子「朝鮮印象記」（昭16・5『季節の随筆』万里閣）。

19 05・10・20「都留文科大学研究紀要」62集

20 拙稿「壺井栄論(2)―第二章　結婚（上）」（91・10・1「都留文科大学研究紀要35集」）同「隠された真実―壺井栄における作家転身の意味」（94・2・15「言語と文芸」110号　おうふう刊）など参照。

21 筆者が佐多稲子邸を訪問したのは、昭和57年8月31日。懇切にご教示下さった今は亡き氏のご厚情に深謝すると共にご冥福を祈る。

22 佐多稲子「壺井さんとの旅」（昭43・1・10「月報62」現代文学大系39　筑摩書房）同「小豆島再訪」（昭62・1・1「四国作家」11号）。

23 壺井栄から池田小菊宛書簡が（1）日本近代文学館に23通収蔵、(2)『壺井栄全集12』（99・3・15　文泉堂出版）に1通収録されている。(1)—昭16・8・26付の書簡参照。

24 注23の(1)—昭16・9・24付の書簡参照。

25 注23の(1)—昭16（近代文学館では18とするのは誤り）・12・28付書簡参照。

26 注23の(1)—昭17・5・19付書簡参照。

27 昭18・9・26付栄から池田小菊宛書簡（『壺井栄全集12』99・3・15　文泉堂出版）

28 大井広介〈「垢」について〉（昭31・7・20「壺井栄作品集しおり6」）。

29 栄「窓」（昭15・8「改造」）。

30 栄「『絣の着物』についてのお願い」（昭33・6・30「週刊新潮」）

31 栄「『非常時』のころの作品」（昭31・5・20　壺井栄作品集4『海風』所収　筑摩書房）

32 初出と初版の本文を校合して異同を調べてみたが、現在初出の判明しているものについては作者の弁は妥当なものと考えられる。

33 初版本末尾の記載には「（昭和二十年九月）」とあり、これは脱稿の年月を示していると考えられる。

34 ここで以下に検討する作品は従来未見のもので、いずれも拙編の『壺井栄全集1～2』（97・8・15～10・15　文泉堂出版）に所収。

35 この作品は戦後に至って単行本としては『渋谷道玄坂』（昭23・12・20　新日本文学会）に収録されたのみ。

36 真澄については例えば拙稿「壺井栄論(11)」（96・10・25「都留文科大学研究紀要45集）の「二」の記述参照。

37 久米正雄の発言は全て後出の『辻小説集』の「緒言」に記されている。